

『問いを立てて作品を読む』

絵本を用いた教員養成大学での授業づくりの試み

高橋 亜希子

(北海道教育大学)

【問題と目的】

教員の生徒指導や教材研究においては、子どもの気持ちを読み取り、状況を深く理解し解釈する力が求められる。しかし大学での教育実習や模擬授業において、学生が教科書や既存の指導案の内容を越えられないことも多い。筆者は学生の授業力向上の取り組みの一つとして『問いを立てて作品を読む』という内容の演習を2007年から6年間行ってきた。ビデオや文学、絵本などのテキストを一緒に読み、一つや二つの設問をたて、ディスカッションを通して題材を読み深めることで、解釈を深め、話し合いを組織する力をつけることを目的とするものである。本発表では演習を通して、学生が ①問いを作る際に必要なこと②話し合いを行う際に必要と思うこと、についてどのように考えたかに関してレポート分析を行い、授業の意義の検討を行う。

【授業の概要】

演習の参加人数：6～15名（小学校教員養成課程）、対象・時期：3年生前期（教育実習前）、回数：15回
授業の進め方：①題材を読みあわせる。（絵本を読み聞かせる、映画を見る）②問いを提示する③問いについて個人で考える④ホワイトボードや黒板などを使って互いの意見を交換する。意見を言う際には根拠を述べる。初めの5回は筆者が題材を提供し、問いを立てる（『魔女の宅急便』（なぜキキは飛べなくなったのか？）『百万回生きた猫』『おおきな木』『星の王子さま』。後半は司会を学生に交替し、学生が題材を選び発表を行う。
題材選び：基本的には学生自身が選び、2、3の設問を立てる。発表時間が45分のため絵本が中心である。必要があれば筆者が前日に相談にのる。問いが決まるまで2転3転する学生もいるが全員が順調に発表を行う。

【分析】

2012年学期末の学生のレポート10件に関して「問いを立てる上で必要と思うこと」「話し合いを行う際に必要と思うこと」に関する2点に関する記述を分類した。

「問いを立てる上で必要と思うこと」1,テキストの解釈・理解：「テキストを読み込み、多面的に内容を読みとり、自分なりの解釈をすること」（6名）、2,自身のねらいを理解すること：「教材のどこに焦点を当て、何を児童に伝えようとしているのか、何を考えさせたいのかということ自分で理解すること」「教材から読みとってほしいことを深く考えられるような問いを作ること」（6名）、3,最終的に自らに置き換えて考える問いを作ること（6名）、4,考えを揺さぶり、意見の多様性が見られる問いとすること（4名）5,問いの順番・問い同士の関連性（3名）、6,子どもの素直な思いが出るようにすること（1名）、7,多様な答えを予想しておくこと（1名）

「話し合いを行う際に必要と思うこと」

- 1 他人の意見を聞く、尊重すること（6名）「ただ聴くのではなく、共感的に聴いたり、自分の意見とはどこが違うのか考えながら聴くということ」
- 2 話し合いの形式の工夫（5名）「子どもたちの実態やレベルに合わせ、自分の意見を述べさせるだけにならないような話し合いや他の人の意見をしっかり聴き、意見について考えさせる話し合いにする」「同じ意見の人同士」や「隣の人と意見交換」など範囲を狭めて一度話しあい、その後に全体で話し合うなどの工夫をする」
- 3 設問の意図に合わせた発表方法を教師が用意すること（1名）「共有したい意見は全員の前で発表したり、多様な意見を出したいときはグループで話し合ったり、自己解決できる部分はワークシートに書きこむだけにしてと教師がみんなの考えを把握した上でどのように発表させるか選択することも大切」

【考察】

教材の解釈・理解、自身のねらいの意識化、教材の本質に関わる問いを立てる、話し合いに関しては、他人の意見を聴く、形式の工夫など、授業の本質的な点が学生に意識されており、授業づくりに生かすという本演習のねらいが達成されていると思われる。探索的な分析段階にありデータを蓄積し、詳細な分析を行いたい。

本演習は学生の選ぶ絵本・題材が筆者にも興味深く、学生同士も互いの内面の違いに触れ、互いを理解する機会となっているようである。互いの内面（sense）を重ねつつ分かち合い話し合う機会としての発達援助的な役割も今後検討を行っていきたいと考える。（Takahashi Akiko）